慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	タンホイザーに関する若干の基礎的事項について
Sub Title	Introduction to the study of Der Tannhäuser
Author	荒井, 秀直(Arai, Hidenao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1961
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.12, (1961. 7) ,p.102- 120
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00120001-0102

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

タンホイザーに関する若干の基礎的事項について

荒井秀直

タンホイザーという名前は我々には非常に親しい名前である。物語により、あるいは音楽により、世界中のほとんど誰もが知っている名前の一つであろう。しかし、十三世紀の詩人タンホイザーについては日本ではその研究が全くなされていない。ドイツでは十九世紀以来タンホイザー研究は着々と進められ、かなり詳細な点にいたるまで明らかにされつつあり、ヨハンネス・ジーベルトの綜合的な研究[註1]によって一つの頂点に達した観がある。中世ドイツ文学の詩人が皆そうであるように、彼もまた、出身地、身分、生涯等不明な点がすこぶる多い。これらの問題に関してドイツの研究者は古文書や紋章などから解決をみようと努力している。これは全く我々の力の及ぶところではない。我々に与えられた手がかりは、詩人の作と伝えられる十六篇の詩のみであるが、幸なことに彼は宮廷文学の伝統を破り個人の体験をかなり具体的にのべているので、これから詩人の輪郭を求めることは、なお不明の点が多く残されてはいるものの、当時の他の詩人に比べるとかなりのところまで可能になっている。そこで、ジーベルトをはじめ数多くの研究者により提供されている資料をもとにして、我々が理解出来る範囲でまず彼の出身地、身分、生涯を求めてみようと思う。次に彼の残した詩を検討し、我々は彼をドイツ文学史上いかなる点でとらえなければならないかを考察し、さらにいわゆるタンホイザー伝説の発生と進展の経過を追

ってゆきたいと思う。

一、詩人タンホイザーについて

従来、タンホイザーの出身地についてはいろいろな意見があり、ザルツブルク、ニュールンベルク、レーゲンスブルク、アイヒシュテット等があげられてきた。[註2] ジーベルトの伝えるところによれば、バイエルン語が用いられる地方には Tannhausen という名の小邑が多数あり、このため詩人がバイエルンの一族の出身者であるという一般の推測に非常にあずかるところがあるという。そしてその位置はニュールンベルク、アイヒシュテット、レーゲンスブルクの間であるという。十二世紀及び十三世紀の文献が伝えるところによれば、この地方に de Tanhusen 又は Tanhuser と呼ばれる人が多数いる。次にジーベルトにより紹介されている人物と記録されている年代、場所をあげておこう。この地理的分布から詩人の出身地に関するおよその輪郭が得られるであろう。

1 Um 1140. Hainrich de T. Weihenstephan bei Freising.

2 1145. Sigiboto de T. Bamberg.

3 1147. Uto de T. Regensburg.

4 1181. Gotefrid und

5 1181. Hartman de T. Regensburg.

6 Um 1186. Eberhard de T. Prüfening (Priefling) bei Regensburg.

7 Anfang des 12. Jahrhunderts. Oudalricus und

8 Anfang des 12. Jahrhunderts. Adalhalm de T. Prüfening.

9 Ende des 12. Jahrhunderts. Wernher et

10 Ende des 12. Jahrhunderts. filius eius Gotfrid de T. Weltenburg bei Kehlheim.

11 Vor 1217. Rodegerus de T. Berchtesgaden.

12 1212. Albertus de Tanh. camerarius, Basel.

13 1215. Siboto de T. Eger.

14 1219. Wirnd de Tanhusin. Eichstätt.

1220. Wirnto de Danhusen. Eichstätt.

15 1228. Fridericus de T. Würzburg.

16 1242. Ulricus de T. Regensburg.

17 1242. Lup. de T. bei Nürnberg.

1246. Lupold Tanhuser. Augsburg.

18 1246. dominus Siboto Tanhuser. Augsburg.

19 1243. Hermannus de T. canonicus Eistetensis. Eichstätt.

1245. Ders. Eichstätt.

1248. Ders. Eichstätt.

20 1255. Albertus de T. cognominatus Rauber. Eichstätt.

21 1266. Otto de T. Wallerstein bei Nördlingen.

22 1272. Fridericus de T. Regensburg.

23 1275. Gotfried von Tanhausen, Vitzthumb (Vizedom) zu Friesach in Kärnten.

註3 騎士階級を構成する者にはいろいろな素性があった。騎士階級は貴族のみならず、館出仕や、騎士になるべきいろ〳〵な務めを経て出世した多数のミニステリアーレ (Ministeriale) をも包括していたからである。彼らはもともと隷民階級から成り上り、次第に普通の自由民以上に出て、しまいには貴族と融和して一つの身分となった人々である。彼らの中から下級貴族が出現した。そしてこの発達が一段落つくと（十二、十三世紀頃）、騎士階級は他の階級と隔絶されるようになった。彼らは封土を君主から与えられるため、自分

たちの名前をその土地にちなんで名づける者も出てくる。

したがって、前記の記録に残っているタンホイザーたちが、その土地の出身であったかどうかをにわかに決定することは不可能であるが、前記の記録にたとえ若干の変更が加えられるにしても、タンホイザーが南部ドイツの出身者であることは明白である。そしてこの記録をたよりに更に狭い範囲に限ってゆくならば、やはり全体の半数以上を占めるニュールンベルク、アイヒシュテット、レーゲンスブルクを含む地方に限られてくるであろう。詩人をザルツブルクやケルンテンの出身とするにはあまりに資料に乏しすぎる。又、彼の生涯がニュールンベルクを中心としていることや、彼の詩の中にニュールンベルクの思い出を歌っている部分（XII）があることなども、前述の考え方の正しさを支持している。更に進んでラープ（Raab）は、詩人を上部プァルツのノイマルクト近郊のタンハウゼン村の出身であるタンハウゼン一族に属するものであるとする。[註4] これについては、彼の「十字軍の歌」（XIII）を考慮に入れなければならない。彼が十字軍に参加し、遠征途上嵐に会い、いろ〳〵な風の名前をあげた後で云う言葉は、この問題を解く鍵を含んでいる。

Waer ich uf dem Sande,
der namen wisse ich niht;（XIII 77～78）

現在では Sand なる土地はニュールンベルク附近には見当らないが、ジーベルトの考証によれば、ノイマルクトがニュールンベルクの管轄に属していたことがあり、ニュールンベルク近郊のザント、と呼ばれていた所があったという。そこでジーベルトは、ザントとは彼の故郷のことであり、したがって、Waer ich uf dem Sande は、故郷に留っていたならば、の意味である、としている。[註5]

以上の事柄から、詩人はバイエルン種族に属するが、更にくわしく限定すれば、上部プァルツ、それもニュールンベルクを中心とする地方の出身であることは確実であろう。ドイツ文学史の書物を何冊か調べてみると、彼がノイマルクトの出身であるということはかなり認められているようである。

詩人の出身地に関する考察は、彼が騎士階級、それもミニステリアーレであったことをほゞ明らかにした。彼がいかなる身分であっ

たか、という問題に対しては、古文書による考証によらなくても、彼の残した詩から解答を得ることが出来る。

彼の詩を構成している要素を大別すると庶民的なものと貴族的なものとに分けられる。前者は主として庶民の踊りを歌った部分である。彼は庶民の生活に目を向け、且つ詩に歌い込みはしたが、それは彼の詩作の態度がそうさせたので、彼が送った生活とは全く別のものだった。彼の生活を端的に示すのは後者であって、こゝには鷹狩、狩猟、婦人崇拝、国王讃美、十字軍参戦等、騎士としての生活を示すものが見られる。さらに晩年の作と思われる詩（XV）では hochgemuot の失なわれてゆくのをなげいているが、この hochgemuot という言葉こそ騎士全盛時代に於ける宮廷騎士世界の高揚せる生活感情に他ならない。このような騎士生活の理念が失なわれてゆくのをなげく者が卑しい身分の者ではあり得ない。詩の形式の面から見ても、彼の詩は従来の宮廷歌謡の形式をそのまゝ受けついだものである。

一部には彼を流浪のローマカトリック教徒としたり、所を定めぬ吟遊詩人であるとする説もあるが、これを裏づけることは不可能である。彼の詩のどこをみても故郷を持たぬ男の悩みが感じられないどころか、むしろ生活の喜びにあふれている、いきいきとした詩が多いほどである。彼を流浪の者と考える根底には、後世の伝説の魅力が何らかの形で作用しているのであろう。

彼がいつ頃生れたかをはっきり決定することは出来ない。彼の生涯の最初の確実な事はフリードリッヒ二世に従って第五回十字軍に参加したことであり、このことは「十字軍の歌」（XIII）として歌われている。この十字軍は一二二七年から二九年にかけて行なわれたもので、この時彼がすでに成人していたことを「十字軍の歌」は示している。したがって彼は恐らく一二〇〇年をすぎてほどなくして生まれたのであろうと推定される。十字軍に参加した後の彼の行動はしばらく不明であるが、第五の舞踏歌では東方各地についてかなりくわしい記述があるので、あるいはその後、地中海東岸各地をまわっていたのかもしれない。歴史の伝えるところによれば、一二二七年夏、先発隊がイタリアを出発し、一二二九年三月十七日、本隊がイエルサレムに到着、同十九日にははやくもそこを出発している。彼がこれを同じ行動をとった証拠はどこにもない。

フリードリッヒ二世はイタリアの政治に力を注ぎ、ドイツの政治は我が子のハインリッヒに一任した。ところが、父と子ははげしく

反目し合うことゝなり、ハインリッヒはフリードリッヒに対し叛旗をあげた（一二三五年）。フリードリッヒは急遽ドイツに帰り、ハインリッヒを降服させ、臨終の日まで（一二三七年）幽閉しておいた。間もなく第二皇子、コンラートが王に選ばれた（一二三五年）。

彼は第六の舞踏歌の中で前記の三人をそれぞれ讃えている。このことから、十字軍より帰国した彼は、一二三五年までハインリッヒのもとに、それ以後はコンラートのもとにいたのではないかと想像される。

次に彼が姿を見せるのはウィーンである。彼がいつウィーンに来たかは明らかでない。彼はウィーンでフリードリッヒ二世（戦闘主）の宮廷にいた。後に彼はこの時代を彼の生涯の最高の時代として回想している（XIV）。彼はウィーンに美しい館を持ち、さらに郊外にも立派な土地を所有することが出来た（XIV 37～39）。しかし、一二四六年六月、ハンガリーと交戦中のフリードリッヒ二世が陣歿し、この幸福な時代も終りをつげた。これ以後彼はどこにも腰を落ちつける場所を見出せず、ザクセン、ブラウンシュヴァイク、ブランデンブルク、シュレージェン等をさまよったものと思われる（VI）。最後の詩作は一二六六年と推定される。こゝで彼はたくさんの諸侯の名をあげており、これは彼のこれら諸侯との関係や、時代の決定など、彼の生涯を復元するうえにかなり役に立つと思われるが、これにはかなりくわしい歴史の知識を必要とするので、この稿でその関係を明らかにすることは不可能である。

このように彼の生涯も、単なる憶測以上に出ぬものを多く含んではいるものゝ、当時の他の詩人の場合と比べると、彼が詩の中で提供してくれる資料のおかげで、かなりその輪郭がはっきりしていると云えよう。

ミンネザングの父と云われるラインマル・フォン・ハーゲナウ（Reinmar von Hagenau）が完成した正統的宮廷歌謡は、彼の弟子とされているヴァルター・フォン・デル・フォーゲルヴァイデ（Walther von der Vogelweide）の低きミンネ（Niedere Minne）の導入により早くも変貌をとげた。それまで身分の高い既婚婦人がミンネの対象であったのに対し、ヴァルターは身分の低い、しかし純真な乙女をミンネの対象に選んだのであるが、そのため卑俗に堕することなく、あくまで宮廷抒情詩の基盤の上に立ち、自然を背景として独自の美しい世界を展開している。

ヴァルターの拓いた道をさらに前進させたのはナイトハルト・フォン・ロイエンタール[註6]（Neidhart von Reuental）である。バイエ

ルンの騎士である彼は宮廷的詩風でもって農民を歌い、当時は非常にもてはやされたが、ヴァルターはナイトハルトの詩が歌われ出したことを快く思っていなかった。おそらく農民風な踊りが舞踏歌と共に宮廷に入り込んできて節度ある朗らかさが押しのけられてしまうことを恐れたからであろう。ナイトハルトの出現はミンネザングの世界を大きくゆさぶった。これはミンネザングの新たな発展と云うよりは、全く異質なものゝ混入による混乱と云った方がよいかも知れない。ナイトハルトは特に農民の踊りを素材としているが、彼の歌が全部農民調なのではなく、農民風なものと宮廷風なものとがまざり合っていて、しかもそれが非常に極端な形であらわれている。このようなものが宮廷でもてはやされるのは従来の観念的なミンネザングに対する反動からであろうと云われる。

詩人タンホイザーはこのナイトハルトと常に比較して論じられる。タンホイザーの本質は何か、しばらく彼の作品を検討しつゝ、最後にドイツ文学史上に於ける彼の位置を定めたいと思う。

タンホイザーの作と伝えられる十六篇の詩の中心をなすものは六篇の舞踏歌である。それぞれの制作年代は不明なものもあるが、おそらく、彼の生涯を通じて詩作されたものと思われる。これらはすべておよそ百行から百五十行程度の長さで、二つの部分から成っている。前半の部分は踊りとは関係のない叙事的な部分で、こゝに扱われている主題はそれぞれ全く異った趣きをもっている。それに続いて後半の踊りの部分がはじまる。踊りをしようと集ってくる人々、踊りへの誘いの言葉、喜々として踊るさま、女の踊り手の姿、音楽のひゞき、かけ声、踊りがますゝ高潮してついにはヴァイオリンの絃が切れるが、なお踊り続ける庶民の姿が目の前にある如く生き生きと描かれている。そしてこゝには作者自身もときゞ顔を出している。[註7] この中でも第二と第三の舞踏歌は抒情的、牧歌的な点で他の作と区別され、第二では単純な形式と優美な語らいが牧歌的風景ととけあって宮廷風な詩形を伝え、舞踏歌というよりはむしろ物語といってよいほどである。こゝでは踊りもほとんど暗示程度に留っている。第三の舞踏歌は自然を歌う、いわゆる Natureingang にはじまり、外国語をふんだんに使った華麗な自然描写に続いて村の娘が登場、作者は彼女の身体の細部にいたるまで克明に描いた後に二人の対話となり、最後に踊りとなる。この間の美事な場面の変化と軽快な言葉、そして踊りへの自然な導入は、この歌を彼の舞踏歌の中でおそらく最高の傑作としている。

これに対して、フリードリッヒを讃える第一の舞踏歌、文学上の有名な恋人や婦人を歌う第四の舞踏歌、彼の見聞を披露する第五の舞踏歌では、前半と後半の対立が著るしく、前半の語りから突然後半の踊りに移る。この急激な変化、異質のものゝ衝突は、明らかにナイトハルトを思い出させるものを含んでいる。

第六の舞踏歌は一二六六年の作と推定される諸王讃歌で作者はこゝで最も簡単な形式を用いている。三節九行からなる導入部に続いて彼はまずフリードリッヒから彼の保護者の礼讃をはじめるが、それはすべて四行を一節とする簡単な形式に終始する。こゝにはそれまでの作に見られるような内容の変化も、詩の長さに基づく調子の変化もない。そのうえ、この詩には踊りの部分が全く欠けている。舞踏歌でありながら踊りの部分が欠けているというのは全く奇妙なことであるが、そのため、踊りの部分の欠けている第二と第六の舞踏歌を除けて、タンホイザーの舞踏歌は四篇であるとする学者もいる。[註8]

それはそれとしてもう少し舞踏歌の内容にふれておこう。前にも述べた通り、彼は第三の舞踏歌で外国語をたくさん使っている。彼は Freude の代りに tschoie をもって野原を行く、そこには Wald の代りに fores があり、Bach の代りに riviere が流れる。彼は鳥が tschantieren し、うぐいすが toubieren する中で美しい creatiure と parlierenする。……ヴィルヘルム・シェーラーはこの点を指摘して、「平凡な事物をいうのに厭というほど外国語を使い、それによって明らかにドイツ人の外国かぶれを嘲っている」[註9]、という。又、第四の舞踏歌にはいろいろな有名な婦人や恋人たちが出てくるが、こゝにのべられていることは全く意味のないことばかりである。例えば、トリスタンはモロッコの女王と結婚した……。こうしたことは意識的に行なわれたにちがいない。我々は外国語の度重なる使用や、無意味な発言のうしろに、弱体化した中世末期の宮廷社会に対する作者の批判を見る思いがする。そして、それを最も端的にあらわしたのが行きすぎたミンネディーンストをあざ笑った詩（X）である。婦人たちは求愛する騎士に向って不可能なことを要求する。ライン河の水路をコーブレンツのそばを流れぬようにしてほしい、陽の没する湖から砂を取ってきてもらいたい、月の光を奪ってほしい……。シェーラーはじめ幾多の人は彼を滑稽詩人であるとしている。たしかにこの詩だけを見ればこのようなミンネディーンストは馬鹿げた愚かしいものであるが、我々は彼もまた騎士であった、しかも hochgemuot の失なわれてゆくのをなげく騎士であったことを忘れてはならない。そのような彼が、ミンネディーンストの愚かしさを、他の滑稽詩人同様あざわらってばかりいられたとは考

えられない。詩人として騎士として多くの宮廷に出入し、騎士生活の表裏を知りつくした者の口から出たこの言葉は、単なる皮相的な軽蔑の言葉ではなく、騎士社会に向けられた痛烈な批判とみるべきであろう。そうした彼がミンネを歌う場合、彼は宮廷風な冷たく慎重な愛人ではなく、自分の愛人の魅力を見出して心に強い感動をおぼえ、ためらうことなく卒直にその気持を歌に読み込むのである。

たしかに、シェーラーたちが指摘するようなユーモラスな一面を彼が持っており、しかもそれが彼の詩の中で重要な役割を演じていることは否定出来ない。しかしそれは婦人崇拝にしても自己の生活をのべる場合にしても、事実をありのまゝのべることから生ずるのであって笑いを唯一の目的とし、聴き手に媚びるような性質のものではない。彼の家を訪れる常連が欠乏氏やろくでなし氏や貧乏神氏であり（XII）、彼が財産をなくしたのは、美しい婦人、うまい酒、乙な料理、それに週二回の入浴のためで、家には屋根もない、部屋には扉もない、酒倉は崩れかゝり、台所は火事で焼けた（XIV）、という彼の生活ぶりは、表現はユーモラスであるが真実の生活と見てよいであろう。彼のこの事実をありのまゝに描写する態度は「十字軍の歌」と庶民の踊りによくあらわれている。

ヴァルターもナイトハルトも十字軍に参加してそれ〴〵十字軍に関する歌を残している。ヴァルターには、キリストの生れた聖地に足をふみ入れた感激、罪の救いへの願い、聖地開放の呼び掛け、神への心からの祈りがあるが、ナイトハルトのは望郷り歌とも云うべきもので、聖なる戦いへの喜ばしい旅については一言もふれておらず、聖地を前にしての感激も、異教徒に対する戦いもなく、あるのは長途の旅の不快さと望郷の念だけであるという。タンホイザーのは十字軍の歌とはいうものの、ナイトハルト同様、宗教的な感激も厳粛さも、戦闘に対する意欲もなく、その中心をなしているものは海上で遭った嵐の描写である。船は嵐にうたれて岩につき進む。舵はこわれ、帆は飛ばされて海に投げ出される。乗組員の悲しみの叫びが我々の耳にまできこえてくるようである。我々はタンホイザーの文学に真の現実性の開始を見ることが出来る。このような現実的感覚の持主である彼は庶民の踊りを、まるで我々の目の前にあるかの如く生き生きと描き出してくれる。こゝでは貴族の生活を描写した時とはうって変って言葉もリズミカルで、健康で明るく楽しい庶民の生活をたゝえ、人生を肯定する楽天的な思想を云いあらわしている。

Uf wol uf kint, prüevet daz leben !

sit uns got den lip hat gegeben,

So suln wir singen.

froeliche springen!　(I 113～116)

このようにタンホイザーの詩作の態度は現実性を根本としたものであり、この上に立って貴族の社会と庶民の社会を見た彼が前者に対して批判的であり、後者に対して好意的であったということは、彼の態度によることは勿論であるが、同時に一方は古い伝統としきたりに縛られて次第に衰弱してゆく勢力であるのに対し、一方は新しい時代の担い手として頭角をあらわしつゝある新興勢力であるという歴史の流れを感じないわけにはゆかない。かくして私は詩人タンホイザーを、宮廷芸術の流れをくむと同時に、自然を愛し婦人を愛し、世俗とその喜びを肯定し、ユーモアを忘れぬ新しい生活感情をあらわす者として、従来ややもすれば低く評価されがちだった彼をあらためて認識する必要があると信ずる。騎士の身分に生れながら彼をして宮廷詩人たらしめなかったものは彼の内部にひそむ性質であって、これが彼の生活と文学とを分離させず、やゝもすれば観念的になりがちだった文学に現実感を加えたことは高く買われてよいと思う。彼はこのように宮廷文学から庶民の文学に道を開く、いわば橋渡しの役をしたが、ヴァルターも高きミンネに対して低きミンネを歌い宮廷芸術を一歩民衆に近づけ、続いてナイトハルトも農民を題材にとり入れタンホイザーの道の先駆をなした。しかし両者の根本的なちがいは、ナイトハルトがあくまでも貴族の側に立ち、単に素材の目新しさだけを求め、宮廷人の笑いを買うのを目的として農民を用いたのに対し、タンホイザーはむしろ農民の側に立ち、彼らを讃えた点にある。また叙事詩の面ではゴットフリート(Gottfried von Straßburg)の「トリスタン」が従来のものとは趣を異にし、騎士の冒険とか宗教問答などを扱わず、もっぱらミンネを主題とし、貴族文学の高みから全人間的な感情へ通ずる道を開いたことは注目されなければならない。宮廷文学と庶民の文学との橋渡しの役を果した彼はしかし宮廷文学最後の人であった。彼をもって宮廷文学は終りをつげた。彼の後の詩人としては、ほゞ百年を経た後のオスヴァルト・フォン・ヴォルケンシュタイン(Oswald von Welkenstein 1367～1445)があげられるだけである。

当然のことながら彼の文学にも幾多の欠点が見出される。現存する詩がわずか十六篇であるというのはまことに残念で、これだけでは満足に語れないのは当然であるが、まず何といっても視野が狭いということがあげられる。彼の詩の対象は踊りと自己の体験あるいは生活に限られているといってもよい。彼の詩には宗教や政治は全く歌われていない。その上、文体が単調である。ich という語が多く使われているため、事柄が眼前に彷彿するような現実味を持たせる上の効果はあっても、反面単調さは避けられない。それは文体の美しさまでもそこねてしまう。このような題材の貧弱さ、詩の単調さ、美しさの欠除等のことから、やはりヴァルターには数歩劣っていると見なければならない。

中世ドイツ文学はハルトマン（Hartmann von Aue）、ヴォルフラム（Wolfram von Eschenbach）、ゴットフリートに代表される宮廷叙事詩と、ラインマル、ヴァルター、モールンゲン（Heinrich von Morungen）に代表されるミンネザングにより隆盛期を迎えた。これと並んで、十字軍に参加した吟遊詩人、放浪詩人たちが自分たちの見聞や体験をもとにして空想とユーモアに満ちた物語を語り、エキゾチックなものに対する民衆の好奇心をかり立てた。タンホイザーはこの両方の文学を呼吸しそれを民衆に引きついだ。もとより中世文学の巨匠たちにはるかに及ばずとはいえ、彼らの文学と民衆の文学との橋渡しをした役割は高く評価されなければならない。中世文学は彼の存命中早くも衰退の道をたどり、続いて神秘主義の文学が登場してくる。騎士社会もシュタウフェン朝の滅亡と共にもろくも崩れ去った。かゝる時代の転換期に生きた彼が独自の性格をもって登場してくるのは、すでにのべた彼の態度によることは勿論であるが、同時に時代の流れを考えずにはいられない。中世ドイツ文学はさまざまな要素の上に築かれたが、それを導き進化発展させたものは、思想的にも社会的にも人間として進むべき自然の方向であったと云えよう。タンホイザーの出現も、偶発的な、文学史上の孤児となるような特異なケースでは決してない。彼を彼たらしめたものは現実に立脚した彼の態度であると同時に、彼をとりまく時代の動きでもあった。

騎士の没落は民衆の抬頭を促し、市民が文化の中心となった。文学も民衆の手に移り民謡が復活した。タンホイザーはその中に生きつゞけ、タンホイザー伝説となって再び我々の前に姿をあらわす。

なお、タンホイザーの六つの舞踏歌がいかに歌われ、演奏されていたかは興味のある問題であるが、現在ではそのうちの第四の舞踏歌の楽譜がハンス・シュパンケ（Hans Spanke）により発見され、一九三二年に発表されただけである。これをメロディーの型にしたがって分類すると次の如くなる。

節	行数	メロディーの型その1	メロディーの型その2
1	4	A	A
2	4	B	B
3	4	C	C
4	4	B′	B
5	8（4＋4）	D	D
6	4	B′	B
7	4	E	E
8	4	B＋B′	B
9	8（4＋4）	F	F
10	2	G	G
11	4	B＋B	B
12	2	Fの一部	F
13	2	G	G
14	4	B″	B
15	4	H	H
16	12（6＋6）	I_1, I_2	I
17	4	F	F
18	2	G	G
19	4	H′, I_1	H
20	12（6＋6）	J_1, J_2	I
21	4	F′	F
22	2	G	G
23	4	H	H
24	12（6＋6）	I_1欠	I
25	10（4＋6）	J_1欠	J
26	4	欠	I
27	4	欠 I_1	I
28	4	J_1	J
29	2	K	K
30	2	L	L

このうち、IとJとは一部似通っている点があるのでIとJを同じ部類に入れゝば、全体はほぼ規則的な反復をもとにして五部に分けることが出来る。さらに、第十四節と第十五節との間に大きな線をひくことが出来る。これは前半の曲が四分音譜を基とするのに対し、後半は八分音譜を基とするからである。[註10] 第二十六節は欠けているが、これを全体の規則性から想像してかりにIとすれば、全体の曲の大体の構成は次の如くなる（メロディの型その2参照）。これら一つ一つのメロディーは若干の例外を除いてくり返して歌われる。例えば第一節を構成している四行はそれぞれ二行づゝに分けられ、最初の二行と後の二行は同一メロディーで歌われるのである。

この問題については今後しらべなければならない多くの問題を含んでいる。タンホイザー以前の曲、特にフランスから入ってきたメ

ロディーや教会音楽からのメロディー、詩のアクセントの問題等々。これらの点については稿を改めて次の機会にゆずることにする。

二、タンホイザー伝説について

一二五四年、シュタウフェン朝は亡び、ドイツは大空位時代に入った。華やかな騎士階級もこゝに終りをつげ、それと共に文学も騎士の手からはなれた。騎士文学は騎士という特定の階級の文学であり、庶民の生活をその内に包含していたものではなかったので、騎士の没落と共にその文学も亡びるのは当然の結果である。しかし吟遊詩人、放浪詩人は時代の波に押し流されもせず、かえって騎士に代る文学の担い手として登場してきた。彼ら新興文学者の手になった題材は、やはり騎士時代から受けついだもので、英雄物語となり民謡となってその型が変っただけであった。十四世紀以後は十三世紀に現われた市民階級出身の職匠歌人もこれに加わるが、その文学活動はきわめて低調であった。こうした傾向は勿論社会的傾向と平行して現れるもので、文学のみの持つ傾向ではない。この時期には文学的材料なら各方面にありあまるほどあり、この時代の本質をあらわすに事欠くことはなかったのであるが、こうした材料を十分に生かすことが出来なかったのである。演劇が民衆の人気を博しても実を結ばず、現在の観賞にたるような芸術作品を残していない。[註11]

一体、タンホイザーはどのようにして民謡の中に入って来たのだろうか。彼は他の詩人と異って、同時代の人の批評にものらなかったし、後の作家、例えばマイスターシンガーたちの作品が彼の作品を思わせる以外は文書の中にも残されていない。これには彼の舞踏歌が批評さるべき価値もない下賤な歌として押しのけられたということは十分考えられるが、その他にフリードリッヒ二世との関係に於て宗教的見地から考えなくてはならない点がある。

一二一五年、フリードリッヒ二世が即位した頃のヨーロッパは十字軍に熱狂していたが、第四回十字軍以後は指導者にこと欠き、フリードリッヒ二世を除いては他にはなかった。しかし彼は一年〳〵進軍をのばしたゝめ、法王グレゴリウス九世はたまりかねて彼を破門した。こうして幾年かを経たのち、フリードリッヒ二世はやっと十字軍をおこした。これが第五回十字軍である。勿論法王はキリスト教戦士がフリードリッヒの十字軍に加わることを禁止した。フリードリッヒは更に北イタリアに対し宣戦を布告し、大部分の都市を平定し、ミラノに無条件降服を強い、その権力は法王にとっていよいよ脅威的となり、その他の事件がこれに拍車をかけてグレゴリウ

ス九世は新たに破門令を発し、フリードリッヒの不信を責め、彼に対して敵対行為を起した。グレゴリウス九世の後をついだインノセント四世はフリードリッヒを神に不敬の者であるとして最も厳しい破門に処し、皇帝の位や王冠の失権を宣した。

このようなフリードリッヒに近づいていたタンホイザーが主君と同じ思想の持主であったということは十分に考えられることである。その上、彼が歌いあげている世俗の喜びは、教会にとって決して快いものではなかったろう。このようなことのために彼はアンティクリストの印を押され当時から不評であったのではあるまいか。だから、彼と同時代の詩人の批評の対象にもならず、他の作品の中に彼の名を発見出来ないのであろう。このような彼がマイスタージンガーたちのおかげで再び姿を現わすまでいかなる経過をたどったかは全く不明であるが、彼の音楽が非常にすぐれたものであるか、あるいは教会音楽をとり入れたため、聴く人の耳に親しいものとなり、民衆の間にかなり広まり、後にタンホイザー伝説が生ずるにあたってその主人公に彼の名がつけられるようになった、ということは考えられることであるが、彼の音楽がどんなものであったかは現在のところわずか一曲しか残っていないので上記のことはあくまでも想像の域を出ない。伝説として伝えられるタンホイザーの物語は、異教の女神ヴェーヌスと親しくくらすタンホイザーがついに後悔の念にとらえられ、彼女のもとを去って法王に罪の許しを乞うが追けられ再びヴェーヌスのもとに戻る、というもので、エリーザベットの伝説を含まないものである。我々が普通に考えるエリーザベット伝説と結びついた物語は十九世紀になって作られたものである。タンホイザー伝説がどうしてこのような形になったかは疑問の多い問題であるが、イエナに残る歌謡の写本に、タンホイザーの作と伝えられる一篇の懺悔の歌が含まれている。ジーベルトはこの詩が彼の作か否かについては現在のところ決しかねると云っている。[註12] これが偽作でないとすれば詩人タンホイザーと伝説のタンホイザーを結びつける有力な手がかりとなり、伝説の成立を説明する上にも好都合なのであるが、自己の生活をするどく描き出した彼の作とするには罪の告白もどく一般的で特色がなく、後世にまで大きな影響を与えて数多くの文学作品を産み出すほどの生気あふれた伝説を作り出すにはほとんど不適当であると思われる。

タンホイザー伝説を構成するさまざまな要素をさぐってみると、いろいろな国に似たような話がいくつも見うけられる。葉をつけた杖の話は東方に源を発し、スェーデンの伝説にもあるといわれる。[註13] 悪魔のような怪物や、小人の住む山の洞窟の話はいたるところにあるが、とりわけイタリアで最も古くかつ最も重要であとるいう。ヴェーヌスとは本来憧れとか愛らしさとかを意味する古代イタリアの

女神であるが、これがどのようにしてドイツの伝説に登場するようになったかは不明である。グリム兄弟は「ヘルゼルベルク」(Der Hörselberg) なる伝説を伝えているが、これは悪魔の住む山の話で、ドイツにはこの他数篇のヘルゼルベルクに関する話が伝わっている。しかしいづれもタンホイザー伝説と直接関係があるとは思えない。

詩人が死後再び姿を現すのはマイスタージンガー達の歌の中である。この中にはタンホイザーの詩の改作と見られるものがあるという。[註14] これは詩人が後世まで知られていたことを示す好例である。伝説成立の時期を決定するのに一つの示唆を与えてくれるのはマイスタージンガーの作になるタンホイザーの物語である。伝説の最後の部分は、法王に退けられたタンホイザーは再びヴェーヌスの山へ戻るが、三日後、法王の杖に芽がふき出て彼の罪がゆるされたことを告げる、というふうになっているが、マイスタージンガーの作にはタンホイザーの絶望とヴェーヌス山への帰還と謝免が欠けている。つまりこの部分はまだマイスターには知られていなかったのであろう。彼らのタンホイザーは神の恵みとマリアのとりなしを願っている。したがってこれらの詩は、伝説の最後の部分がまだ出来上っていないある時期の作品であるにちがいない。

では、この伝説の最後の部分は何時ごろ、なぜつけ加えられたのであろうか。

マルチン・ルター (Martin Luther 1483～1546) によって宗教改革が行なわれる以前にもオックスフォード大学のジョン・ウィクリフ (John Wiclif 1320？～1384) やプラーグ大学のヨハン・フス (Johann Hus) 等によって教会の徹底的改革が叫ばれて来たことは周知の事実であるが、この宗教思想の推移はタンホイザー伝説の成立に大いに関係がある。伝説の最後の部分、タンホイザーが法王のもとを去ってから三日後に法王の杖に芽が出てタンホイザーの罪がゆるされる、というのは、明らかに法王の力の絶対を否定し、その力の及ばぬことを示すもので、この部分の欠けているものと加えられているものを比べれば、それらの成立の時期を分けることが出来、しかも後者は宗教改革の気運にのって完成されたと見るのが正当であろう。すなわち宗教改革の胎動期とも云うべき十四世紀、あるいは十五世紀にマイスタージンガーたちの歌が成立し、その後、十五世紀から十六世紀にかけて反法王、反教会的最後の部分がこの物語につけ加えられてタンホイザー伝説として今日我々が見ることの出来るような形になったものと思われる。

我々は今まで詩人タンホイザーと伝説のタンホイザーとが同一人物であるという前提に立って話をすゝめてきた。しかし勿論これに

対する反論はある。つまり両者は全く別人であるとする説である。この意見の代表者はガストン・パリ（Gaston Paris）であって、彼は古いイタリアの伝説に基いて彼の意見をのべている。[註15] これがタンホイザー伝説の源となるか否かの決定は出来ないが、たしかに伝説と多くの共通点を持ち、非常に興味あるものであるからこゝに紹介しておく。

[註16] 現在でもイタリアのアペニン山脈にはシビリーニ山という山があるが、こゝは地上の天国として知られており、そこを治めているのはシビラという女であった。冒険好きの一フランス人はこの山の神秘的な穴の奥深く入ってゆこうとして、近所の人々からその場所にまつわる伝説を聞いた。それは特にあるドイツ人についてのものだった。そのドイツ人は実際にその山の奥に入りこむことが出来たが、彼がそこで見出したのは贅沢な衣裳を着飾った貴族や貴婦人たちにとりまかれ、立派な玉座に腰を下している女王だった。美しさを失うことも老いることもないこれらの人々の幸福は、世界が終るまで続くだろうということを彼は聞かされていた。この場所には一つの掟があった。それは、旅行者は八日間そこに留まり、彼の自由意志によって九日目に発つことが出来る。しかし彼がその時にそこを去らないと十三日目まで留まらねばならない。そしてもしその時彼がそこを去らなかったら三百三十日目まで留まらねばならない。そしてもしその時彼がそこを去らなかったら、彼は永遠にそこに留まらねばならない、というものであった。このすばらしい世界にも一つの汚点があった。金曜日の真夜中から土曜日の真夜中までの間、女王と他の魅力的な貴婦人たちは蛇に姿を変えるのである。そのドイツ人がこのことを発見したのはちょうど三百三十日目の時だった。彼はこんな場所に自分が住んでいることは非常に罪深いことだと考えたので、三百三十日目に彼は美しい女主人たちに別れをつげ、罪の告白のためにローマに向った。法王は内心彼を許そうとしたが、他の人々のためにもと、彼の為した行為を非常に重大であるかのように振舞った。法王は彼に苛酷な言葉を用いて彼を追いやった。だが法王は心を改め、再び彼をよび戻そうとしたがその時はもうおそかった。法王の耳に入った知らせは、天国の喜びを失ってしまったドイツ人は、地上の喜びを求めて再びシビリーニ山に戻って行ったということであった。今でも彼は多分その山に楽しく住んでいることだろう。

ガストン・パリをはじめ近世のフランスの学者たちは、この物語が発展してタンホイザーの物語になったと考える。しかしこの意見は今日ではほとんど用いられない。この話はたしかにタンホイザー伝説といろ〳〵な点で一致するし、ドイツにこれ以上類似の物語が存在しないので一応考慮に入れるべきものではあるが、これはあくまでも物語が似ているというだけでその他の点、とりわけ前記マイスターたちの作に対する説明が全くなされていない。これは二人のタンホイザーが同一人物であるとする説の重要な根拠となる点であるから、これを論破するだけの実証がなされなければならない。同一要素を含む物語は各国に共通してみられるものであって、単にこの点からだけでパリの意見に賛意を表するわけにはゆかない。

なお、十九世紀約前半に、ケーニヒスベルクの教授ルッカス（Lucas）が、タンホイザーは「ワルトブルクの歌合戦」の主人公、ハインリッヒ・フォン・オフターディンゲン（Heinrich von Ofterdingen）と同一人物である、という研究を発表しているが[註17]、この意見は今日では全く顧みられない。

このようにタンホイザー伝説については不明のことばかりであるが、いづれにしても十四、五世紀になると国民の中にはタンホイザーの行為に恩恵を与えることを知らなかった法王や僧侶よりも彼の方に味方をする者が出て来た。この時代の詩人は罪人を絶望させず、彼自らに罪の告白をさせて直接神と救済者に向い彼らの恵みと聖母マリアのとりなしとを願った。その後になって法王に見放されたタンホイザーはヴェーヌス山にもどってゆくが、その代り法王自身も永遠にすてられ、その上法王の権力の絶対を否定する結末がつけられたものと思われる。我々はこの中に宗教改革時代の息吹きを感じとることが出来る。二人のタンホイザーは、時代がちがい生き方がちがっていたにしても、両者は共にその時代を代表する典型的な人物であるという点では変りない。

その後タンホイザーは長らく文学の表面に現れて来なかったが、十九世紀に至り多くの詩人の好むところとなり、それらの綜合はリヒアルト・ヴァーグナー（Richard Wagner）によつてなされた。こゝでは今まで救われなかった彼も神ならぬ女性に救われている。

ドイツ中世の抒情詩では、ヴァルターがあまりにも高く聳えているため、従来の研究はほとんど彼に集中し、他の詩人は省りみられることがあまりなかった。ヴァルターの偉大さを否定する気は全くないが、抒情詩全体の動きをみる点からすれば、やはり片手落ちの

観は免れない。これらの中には実際に歌われたものもあったために文学以外の要素が入って来て、そのために一層研究を困難にしていることは事実であるが、それだけに又、今後研究されなければならない点が多く残されている。私の小論はその一端を紹介したにすぎないものである。

註1　Johannes Siebert: Der Dichter Tannhäuser 1934

註2　詩人の出身地に関するジーベルトの研究は詳細を極めている。彼はそれまで称えられて来た説の紹介を行い、それに対する彼の見解をのべている。

註3　この小論に於ける歴史に関する記述はすべて次の書物を参照した。
ウェーバー　広島定吉訳　概観世界史
シュティーヴェ　石川錬次訳　ドイツ民族二千年史
林健太郎　ドイツ史
〃　中欧史

註4　Siebert: ibd., S. 7

註5　ibd., S. 9

註6　ナイトハルトに関する記述は主として伊東泰治「ナイトハルト」（日本独文学会編　ドイツ文学　第二十一号）によった。

註7　彼の詩の中には　Tanhusaere　という名前が五回（I. 104; IV. 133; V. 73; V. 123; XIV. 43）出てくる。

註8　Gustav Ehrismann: Geschichte der deutschen Literatur bis zum Ausgang des Mittelalters 1934. S. 265

註9　シェーラー　吹田順助監修「ドイツ文学史」第二巻　三五・三六頁

註10　曲の検討には現在の譜記法に基き書き直されている楽譜を用いた。

註11　このところの記述はシェーラー「ドイツ文学史」によった。

註12　Siebert: ibd.. S. 235 ff

註13　Max Koch: Richard Wagner 1913, S. 116

註14　Siebeit: ibd, S. 241

註15　パリの見解はタンホインザー研究書及びヴァーグナー研究書にて知ることが出来る。

註16　Ernest Newman: Wagner Nights. 1949, S. 73

註17　ルッカスの説は不思議なことにタンホイザーの研究書には全く見られず、ヴァーグナーの研究書にしばしば見受けられる。

なお、以上の他に次の書物を参照した。

Karl Langosch: Die deutsche Literatur des Mittelalters Verfasserexikon.

Helmut de Boor, Richard Newald: Geschichite der deutschen Literatur.

Wolfgang Golther: Die deutsche Dichtung im Mittelalter.

Franz Lechleitner: Der deutsche Minnesang.